

東京都小中学校環境教育研究会会報 **東京の青い空** 第69号

会 長 関口 寿也 多摩市立連光寺小学校 TEL 042-373-1920
事務局長 中村 太朗 江東区立辰巳小学校 TEL 03-3521-1164
HP <http://kankyokyoiku.jp/tokyo>

令和3年度東京都小中学校環境教育研究会研究主題

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進
～つなげる環境教育の輪～

研究部部長 町田市立大蔵小学校 副校長 鈴木 元

I 主題設定の理由

気候変動の影響により世界各地で発生している異常気象や、エネルギー問題、貧困や飢餓など、人類がかつて経験したことのない環境問題が地球規模的に生じている。日本においても、昨年5月に北海道の佐呂間で最高気温 39.5℃に達したことは記憶に新しい。全国的に見ても5、6月に真夏日となる日が多くなっている。さらに10月には、九州で連続真夏日の記録を更新した。現在、小中学校では、新型コロナウイルス(Covid-19)感染症対策のマスク着用と併せて、熱中症対策を講じなければならず、体育的行事だけでなく、日常の校庭利用や水泳指導の中止を余儀なくされることも増加している状況である。

2021年4月、米国で開催された気候変動サミットにおいて、日本政府は温暖化ガスの排出量を2030年までに、2013年度比で46%削減すると表明した。国内では、地域における2050年脱炭素社会の実現に向けた施策を検討する国・地方脱炭素実現会議が6月9日に首相官邸で開催され、2030年までに少なくとも100カ所の脱炭素を実現する先行地域を創出することなどを盛り込んだ「地域脱炭素ロードマップ」を取りまとめた。また、各国政府のみならず、民間企業や経済界はSDGsに対して大変真摯で積極的な取り組みを進めている。ダイベストメントや石炭火力発電所の運用停止、RE100、喫煙対策、フードロス対策等、マスコミが話題を提供しない日はない。その根底にあるのは、SDGsが世界共通言語であるということ、「ひとごと」から「自分ごと」へといった意識の転換と、「企業経営」としての戦略の転換である。

—美しいものを美しいと感じる心—

子供たちは、様々な環境問題について学ぶ機会が増え、問題意識をもつようになってきているが、実生活では、ペットボトル飲料やファストファッションを無意識に手にしている状況にある。特に東京都の子供たちは、自然環境に触れる機会が減り、化学的な染料の色やモニターを通した色など人工的に作られた色に触れる機会が増している。自然のもつ本来の美しさを知らずに大人になってしまう。例えば昆虫の羽の輝き、天然素材の風合いや香り、自然の染料の繊細な色などである。本物のもつ自然な美しさを美しいと感じ、それらを無意識に守りたいと思う心を培っていく。

これまで本研究会が取り組んできたESDは、その実現を可能にすると信じる。それは、教育の、教師の、そして児童・生徒の変容をまさに希求するものである。

教師一人一人が児童・生徒の実態に応じ、自らすすんで環境教育の実践を構築することができるためのヒントとして「学びの地図」を作成した。環境教育とは何か、ESDとは何か、学校現場が来るべき私たちの明日に向けて迷うことなく前進するために、本研究を生かして欲しい。

II 研究の経過

- 1 学校現場でのESD推進状況の確認
- 2 取り組み可能な課題の検討
- 3 これまで取り組んだ「2100年の未来天気」「替えて代えて変える未来」の検証
- 4 5・6年家庭科・総合「自分たちの育てた綿 × 自分の思いが加わったエコなモノづくり」
5年総合「世界を見直して環境を考えよう」、学びの地図作成
- 5 研究会員の学校における授業実践（一部）
- 6 ポートフォリオによる授業検証

III 学びの地図 作成事例

- 1 第5・6学年 家庭科・総合的な学習の時間
「自分たちの育てた綿 × 自分の思いが加わったエコなモノづくり」
- 2 第5年生 総合的な学習の時間
「世界を見直して環境を考えよう」
- 3 作成手順
 - (1) 児童・生徒の実態の把握
 - (2) 教師の思い、願いの明確化
 - (3) めざす社会像及び育てたい力の明確化
 - (4) カリキュラム・マネジメントの視点からこれまでの活動をつなぐ

- 日本の伝統的なものづくりと環境学習をつなぐことで、より効果的に児童・生徒の意識を変えていくことができる。
- 総合「環境」と各教科等のつながりを明確にした。その上で、年間指導計画を作成し、学校の教育活動全体を通して、上記の育てたい力の育成を図った。

IV 終わりに

今年度の研究は、効果的に環境意識の向上を図るために、どのように授業をデザインしているかを再考し、これまでの取組をまとめ、つなぐこととした。学びの地図により、授業のデザインを示すことができた。答えがなく難しいと捉えられ敬遠されてきた環境教育は、明確な答えがないからこそ子供たちとともに考え、様々な問題をつながり捉え、解決むけて行動していく必要がある。まさにESDそのものである。

第53回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会） 報告

調布市立北ノ台小学校長 箱崎 高之

21世紀「環境の世紀」の提言
《研究主題》 「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」
～ 環境教育によって育む学力と環境保全意識 ～

令和3年11月19日（金）、第53回全国小中学校環境教育研究大会（東京大会）を、オンラインによる録画配信という形で開催した。研究発表と講演、ディスカッションを中心に行い、全国から約100名の参加者があった。それぞれの概要は以下のとおりである。

【研究発表】

東京都小中学校環境教育研究会の発表に続いて、長野県、北海道、京都府の小学校で実践された環境教育について発表された。

【講演1】

国連広報センター所長 根本 かおる様から「SDGsを自分事に 私たちと世界・地球をつなげる思考を」をテーマに、豊富な動画と最新データの紹介を交えてお話をいただいた。参会者に対して、子供たちは気候変動の犠牲者だけでなく解決の担い手であることや、SDGsを自分事として考え、声を上げることの大切さについて伝えてほしいというメッセージが送られた。

【講演2】

国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）研究員イヴォーン・ユー様からは、生物多様性の現状についてのお話をいただいた。地球環境問題の中で、生物多様性についてはあまり知られていないが、地球の持続可能性を支えている非常に重要なことであることや、今、危機が起きているということについて、また、それを守るために私たちにできることについて具体的な話をいただいた。

【パネルディスカッション】

ご講演をいただいた根本様、イヴォーン・ユー様と東京都小中学校環境教育研究会研究員の計7名で行われ、「環境問題の今、環境教育の今」をテーマにパネルディスカッションを行った。日頃環境教育を推進している先生から、悩みごとやどのように授業を実践していくのがよいかなどについての話が出され、解決策のヒントとなる意見が多数出された。

第24回全国小中学校 児童・生徒環境絵画コンクール実施

品川区立大井第一小学校長 藤森 克彦

昨年度は新型コロナウイルス感染症防止のため、残念ながら環境絵画コンクールの実施を見送りました。今年度も感染防止の影響で開催が危ぶまれましたが、学校現場や関係団体などからの要望の声や協賛企業からの支援もいただけるとのことで、2年ぶりに実施しました。

このコンクールは、「絵を描く」という子どもたちにとって身近な方法を通して、環境への意識を高め自分たちの行動そのものが地球規模の環境の保全への第一歩であることを意識してほしいとの願いから、毎年開催しているものです。『みんなで作ろう持続可能な社会』『みんなで作ろう豊かな自然』をテーマとして、文部科学省、環境省、日本環境協会の後援をはじめ、(株)みずほフィナンシャルグループ、明治安田生命保険相互会社、丸紅(株)、積水化学工業(株)の協賛をいただき、全国の児童・生徒を対象に5月中旬から9月10日までの期間で募集をしました。第22回から環境大臣賞の受賞作品が、環境省の環境白書の表紙絵に選定・掲載されています。

今回は、コロナ禍にもかかわらず募集期間中に、小学校の部269校・団体より3,131点、中学校の部319校・団体より2,948点の計6,079点の作品が、北海道から沖縄県まで全国各地から応募がありました。東京都内は小学校の部1,804点、中学校の部437点、あわせて2,241点の応募がありました。また、今まで応募されていなかった学校からの応募も多数あり、本コンクールの活動が広がってきていることが分かります。今回6,000点を超えたのは平成17年度（第9回）開催以来のことで大変うれしく思います。コロナ禍であっても、まさに児童・生徒の環境に対する興味関心や創作意欲は健在であったといえます。

今回の学習指導要領においても、持続可能な社会の創り手となる児童・生徒の育成が求められる中、各校で教育課程におけるESDの具体的な取り組みの一つに、本コンクールの参加を計画していただきたいと思います。

◆令和4年度の実施については、5月中旬を目途にご案内いたします。詳しくは、4ページをご覧ください。

高尾山自然観察会報告

多摩市立鶴牧中学校 副校長 天野 拓二

心地よい秋晴れとなった10月30日(土)、昨年に引き続き高尾山での自然観察会を実施しました。天気がよかったこともあり、高尾山は多くの登山客で賑わい、平常の生活が少しずつ戻ってきていることを感じ、嬉しく思いました。

今回の講師は、元公立中学校長であり、東京都小中学校環境教育研究会OBでもある 富田 広 先生をお招きし、11名の参加者と共に高尾山6号路登山コースを頂上に向けて登りました。富田先生から高尾山に自生する様々な植物の特徴について学ぶことができました。植物の特徴や成り立ちなどの話を伺う中で、自然と人間との深い関わりを改めて感じ、考えさせられました。特に、「植物には、足が無い。だからこそ環境の小さな変化に影響され、それが現れる。」と話されていたことはとても印象的でした。霧が多く湿っている場所、太陽の光が多く当たり温かい場所、環境が違えば、そこに生まれる植物も違います。「高尾山のブナは現代の環境の変化により、今後、新しい芽が発芽することができない。今あるブナが最後の世代である。」。今回この自然観察会で高尾山の自然に触れ、自分たちが後生に残さなくてはならないもの、壊してしまったもの、私たちができること、しなくてはならないことは何かを改めて考え、「諦めない、できることはある」との思いを強くしました。貴重な、そして、充実した自然観察会となりました。



「リサイクルの現在について学ぶ」研修会報告

多摩市立連光寺小学校 校長 関口 寿也

11月20日(土)の午後、スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・(公社)日本缶詰びん詰レトルト食品協会主催、(株)教育家庭新聞社協力、東京都小中学校環境教育研究会後援の「リサイクルの現在について学ぶ」と題した研修会をあらかじめリサイクルセンターにて実施しました。当日は学校行事で忙しい時節ではありましたが、11名の参加者ととも有意義な学びを深めることができました。

あらかじめリサイクルセンターは、びん、缶、ペットボトル、食品トレーを家庭から回収して選別、パッキングし、リサイクルのルートに渡すまでを担っている23区内に5か所ある施設のうちの1つです。選別、パッキングの工程を見学した後、荒川区環境清掃部清掃リサイクル推進課リサイクルセンター係長の泉谷清文様と、スチール缶リサイクル協会専務理事の中田良平様のご講義を拝聴しました。

東京都小中学校環境教育研究会では、これまでマイクロプラスチック問題に警笛を鳴らし、授業プランを作成する中で、なぜ永久になくならないプラスチックを生産者が使用し続けるのか疑問を呈してきたところです。今回の研修会で知れたことは、スチール缶やアルミ缶を作るには製造機器の設備投資が大きく、製缶メーカーで製造された缶を飲料メーカーが使用している形態であるのに対し、ペットボトルは設備投資が小さく、飲料メーカーで製造が可能であることを知りました。飲料メーカーもペットボトルをよしとしているわけではなく、「PET to PET」というペットボトルをリサイクルしてペットボトルを製造するという取り組みを始めているそうです。金属缶はご存知のように90%以上のリサイクル率ですが、ペットボトルも少しでも近づけようとしています。ペットボトルは、原料に化石燃料を使用していますが、飲料メーカーへの容器搬入や商品としての飲料の運搬といったエコロジカル・フットプリントでは、現状では金属缶より勝ります。「PET to PET」の率が高まった場合、さらにその状況が混沌としてくることになります。環境教育を考えていく上で、多面的で包括的な視点の必要性を改めて感じさせる研修会でした。



令和4年1月

小中学校長、義務教育学校長 様
 図画工作科、美術科担当教員 様

東京都小中学校環境教育研究会
 会長 關 口 寿 也
 (多摩市立連光寺小学校長)

令和4年度「第25回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール」実施のご案内(予告)

日頃より、東京都小中学校環境教育研究会の活動にご理解ご協力いただき、ありがとうございます。

さて、本研究会では例年標記のコンクールを実施しており、来年度25回目を迎えます。今回の学習指導要領の前文には、「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」ことが明記され、ESD(持続可能な開発のための教育)を踏まえた環境教育の必要性が示されました。小中学校においてSDGsを視野に入れた教育活動の充実を図ることがこれまで以上に重要です。

各校では、次年度の教育課程の作成・検討を進めているところと存じますが、ESDの一環として本コンクールへの参加につきましてご予定いただきますようご案内いたします。

なお、ご案内(応募チラシ)は文部科学省や環境省の後援名義申請終了後、下記のとおり各小中学校・義務教育学校宛に5月中旬を目途に送付いたします。

ご理解ご協力方、よろしくお願いたします。

記

令和4年度「第25回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール」実施内容(予定)

- | | |
|---------|--|
| 1. 主 催 | 全国小中学校環境教育研究会(東京都小中学校環境教育研究会) |
| 2. 後 援 | 文部科学省、環境省、公益財団法人日本環境協会(全て申請予定) |
| 3. テーマ | 『みんなでつくろう持続可能な社会』『みんなで守ろう豊かな自然』 |
| 4. 応募資格 | 小学生(3年生～6年生)、中学生(1年生～3年生) ※義務教育学校等含 |
| 5. 応募期間 | 令和4年5月中旬から9月中旬までを予定 |
| 6. 作品規定 | 絵画・ポスターのいずれか1点、サイズは四つ切画用紙(縦横どちらも可) |
| 7. 応募方法 | 応募作品は各学校単位でまとめて郵送(個人郵送も可) |
| 8. 表彰式 | 令和4年11月末の土曜日を予定(会場は東京丸ノ内) |
| 9. 実績 | 令和3年度応募総数 小学校の部 270団体 3,141点、中学校の部 319団体 2,948点
合計 589団体 6,089点 |
| 10. 入 賞 | 文部科学大臣賞、環境大臣賞(両賞とも申請予定)、研究会長賞、協賛特別賞、佳作等
※なお、入賞作品は、環境省環境白書表紙・裏表紙のほか、環境月間普及啓発用ポスター、環境に関するイベント等に活用させていただく予定です。 |
| 11. その他 | 応募された作品は、参加賞とともに学校宛にまとめて返送します。(個人応募は個人に) |

◇詳しくは全国小中学校環境教育研究会 HP でご覧いただけます ⇒ <http://kankyokyoiku.jp/>

【問合せ先】 東京都小中学校環境教育研究会副会長 藤森 克彦
 (品川区立大井第一小学校長) 電話 03-3771-5240